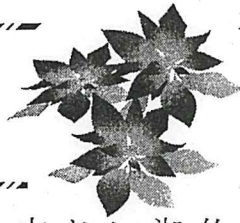


礼拝

令和4年11月21日
7号



成道と平等性 第74回 人権週間に向けて

十二月八日は人間の幸福について考え続けられたお釈尊さまがお覚り(きり)を開かれ、仏陀となられた日です。お釈迦さまは約二千六百年前のインドに生まれ、地球上でただお一人、仏の覚りを開かれた方です。お釈迦様は、「この大宇宙には地球のようなものが無数に存在し、この地球に釈迦が現れたように大宇宙には数え切れないほどの仏が現れた。これらのあらゆる仏(十方諸仏(じっぽうしよぶつ))の先生(本師(ほんし))として存在するのが阿弥陀仏である。」とお説きになりました。経典では、阿弥陀仏のことを無量寿(はかることのできない「いのち」)・無量光(はかることのできない「ひかり」)と表しています。この無限の光はあらゆる闇を除き、辺り一面を明るく照らし、進むべき道・方向をはっきりと示してくれます。そして、最も大切なことは、すべてを同時に誰一人として取り残さずに生きとし生けるものすべてを絶対平等に照らすということです。つまり阿弥陀仏のはたらきは「撰取不捨(せんしよせつしよ)」であり、「阿弥陀仏は私たちを必ず包み込んでくださり、決して誰一人見捨てることはない存在」と考えてもらえばよいかと思えます。また、浄土宗を開かれた法然上人は、阿弥陀仏のはたらきを「月かげ」の歌としてお詠みになりました。「月かげのいたらぬ里はなければども」阿弥陀様の無限の光はすべての世界を照らし続け、「ながむる人の心にぞすむ」その光に気づいた人すべてをすくい取り誰一人見捨てることはない。

科学的に考えれば、私たちが知っている光は、当たればその反対側に必ず影ができてしまいます。つまり光が当たるからこそ、光が当たらないところができてしまふと考えるのが当然です。まさにその通りなのですが、逆にこのことが重要なのです。お釈迦様が説かれたこの光は、そして法然上人が詠まれた月かげ(光)は、遮(さき)ることができない光で、影のできない光を意味します。つまり私達の命や心の中にある、日ごろは気づかない世界(当たり前すぎて気にかけることすらない世界)にまで届き、照らしてく

ださっている光なのです。私達は見える世界を見ていて、それがすべてだと考えてしまいがちです。しかし、見えない世界があつて、見える世界を実現させているのです。例えば目に見ることのできないはるか昔に存在した命がつながり続け、今の私を存在させてくれているのです。そう考えると、無限に広がる見えないう世界が、その世界の力や法則やそれらの織りなす調和により、すべてのものに對して平等に今を存在させてくださっていると言えます。

さて、毎年十二月四日から十日は「人権週間」として人権尊重思想の普及高揚を呼びかけています。今なお存在し続ける、いじめや児童虐待、インターネット上の人権侵害、感染症や障害等を理由とする偏見や差別、ハンセン病問題など、様々な人権問題が依然として解決されない現状があります。これらの問題を解決し、国連の持続可能な開発目標(SDGs)が掲げる「誰一人取り残さない」社会を実現するには、私たち一人一人が人権尊重の重要性を改めて認識し、他人の人権に配慮した行動を取ることがとても大切なことです(法警(ほせい))。今から二千五百年以上も前にお釈迦さまが見つつけられた、誰一人見捨てることのない「撰取不捨」を心に浮かべ、今年の人権週間を、成道の日を迎えていただければと思います。